

# 形式名詞「うち」の意味ネットワーク

ルチラ パリハワダナ\*、高橋 雄一\*\*、近藤 安月子\*\*\*

## 要 旨

形式名詞「うち」は時間的意味や人称の意味などの様々な意味を表す多義語である。「うち」のこのような多様な意味の相互関係、すなわち意味ネットワークを明らかにすることが本稿の目的である。

まず、「うち」のプロトタイプの意味として〈ある空間の区切られた境界の中〉を抽出した。次に、スキーマの意味を〈境界の中〉とする仮説を立てた。「うち」が意味拡張を起こす対象を〈人〉、〈区分を持つもの〉、〈時間〉に大別し、それぞれへのメタファーを介した意味拡張、及びそれぞれの領域内でのイメージ・スキーマ変換またはメトニミーを通じたスキーマの意味の精緻化とその結果として生じた多様な意味について考察した。更に、各意味に対する分析を通してスキーマの意味についての仮説を検証し、最後に、各意味の相互関係を意味ネットワークとして提示した。

【キーワード】「うち」、容器、境界性、メタファー、意味ネットワーク

## 1. はじめに

形式名詞「うち」は、「練習しているうちに慣れてきます」のように時間的意味や「うちらは平均十二時間は働いている」のように人称の意味などの多様な意味を表す多義語である。「うち」がいかに多義的であるかは、以下の表1で示す『広辞苑』第七版の記述からも明らかである。『広辞苑』に記されている第一の意味を手掛かりにすると、「うち」は指示対象の位置関係を表す空間概念であると判断できる。では、上述の時間的意味や人称の意味は空間概念とどのように関わっているのだろうか。メタファーや認知言語学的なアプローチから「うち」の意味を記述した先行研究として瀬戸（1995）及び荒川（2011）が挙げられるが、いずれも「うち」の意味拡張のメカニズムを記述対象としておらず、用法間の関わりを示している荒川（2011）でも上記のタイプの時間的用法や人称的な用法が扱われていない<sup>1</sup>。そこで本稿では、これらの用法も対象として扱いながら、意味拡張の仕組みの解明を目指す。本稿の目的は「うち」による指示対象の空間的位置の定め方及び「うち」の複数の意味の共通性を明らかにし、意味拡張の仕組み及び意味間の関わり合いとしての意味ネットワークを明らかにすることである。

『広辞苑』では「うち」の意味を、品詞別に名詞及び代名詞という二区分に分類した上で、大小項目に分けており、記載されている全項目数は14にも上る。本稿は、国立国語研究所の公開コー

\* 京都大学国際高等教育院

\*\* 専修大学国際コミュニケーション学部

\*\*\* 東京大学名誉教授

表1 『広辞苑』における「うち」の記述

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>うち【内】</p> <p>㊦【名】</p> <p>① (「中」とも書く) 何かを中核・規準とする、一定の限界のなか。</p> <p>① 区域内。内部。万葉集 (17) 「大宮の一にも外にも光るまで」。竹取物語「一のしつらいには」</p> <p>② 限度内。以内。あいだ。宇津保物語 (吹上上) 「年二十歳より一なる人」。「若い一に苦勞せよ」「見る見る一に大きくなった」「暗黙の一に了解する」</p> <p>③ 内裏。宮中。また、天皇。源氏物語 (桐壺) 「今は一にのみさぶらひたまふ」「一の一つ后腹になむおはしければ」</p> <p>② 自分の属する側 (のもの)。</p> <p>① なか。また、国内。保元物語「一には姦臣聚まれり」</p> <p>② 身のまわり。側近。続日本紀 (29) 「一つやっこ」</p> <p>③ (「家」とも書く) 自分の家、また、家庭。隆信集「一つ一なれど」。「一では母がいちばんの早起きです」「一に帰る」</p> <p>④ (「家」とも書く) 転じて、家。家屋。「新しい一が建つ」</p> <p>⑤ 自分の夫または妻。うちの人。うちの者。「一は下戸ですの」</p> <p>⑥ 自分の属するもの。「一の会社」「一の親分」</p> <p>⑦ 仏教で、儒教などを外とするのに対し、仏教の側のこと。平家物語 (2) 「一には既に破戒無慚の罪を招くのみならず」</p> <p>③ 物事のあらわでない面。</p> <p>① 外からは見えない心中。謡曲、松風「思ひ一にあれば色外にあらはる」。「一に闘志を秘める」</p> <p>② うちとけた面。謡曲、経政「外 (ほか) には仁義礼智信の五常を守りつつ、一には又花鳥風月、詩歌管弦を専らとし」</p> <p>③ 公式でない面。保元物語「一、君を助け奉る」</p> <p>㊦【代】</p> <p>自分。わたし。関西方言で、多く女性や子供が使う。「一かて京のおなごや」</p> <p style="text-align: right;">出所：『広辞苑』第七版 p.267</p> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

パス BCCWJ より採集した「うち」の用例を基に、『広辞苑』で記載されている項目の中から現代語において一般的に使われている意味に分析対象を限定する<sup>2</sup>。なお、本稿において取り上げるすべての用例は BCCWJ より収集したものである。

以下において、まず、「うち」に関する従来の研究及び本論の理論的な枠組みについて述べる。次に、「うち」のプロトタイプの意味を確認した上で、スキーマ的意味を仮説として取り出し、「うち」の各意味についての考察を通してスキーマ的意味の検証を行う。最後に、意味拡張の仕組み及び意味間の相互関係すなわち「うち」の意味ネットワークを明らかにする。なお、本論は名詞「うち」だけではなく、「～うちに」や「～うちから」といった機能語化した形式も対象として扱う。

## 2. 「うち」に関する従来の研究

「うち」に関する先行研究には、時間的意味に焦点を当てたもの (Backhouse・Quackenbush 1979、寺村 1983、笠松他 1993、工藤 1995、松中 2008 など)、言語と文化の関わりを論じたもの (牧野 1996 など)、メタファー的側面を論じたもの (瀬戸 1995) などがある<sup>3</sup>。ここでは本論と関わりの深いもののみを概観することにする。

寺村 (1983) は「うちに」を考察対象としながら、その内在的意味のみを抽出する必要性を指摘し、「うちに」の表現を2タイプに分類した。第一タイプとして扱っているのは、「若いうちによく勉強しておかないと後悔する」などの P ウチニ Q で、その場合の「P は、ただの時の幅ではなく、いずれその時期が終わって、次の対立する時期に移行する、そういう未来のある時期と対立

するものとして把握された時の幅である (p. 144)」としている。上記の例の場合、Pである「若い」時期がいずれ終結し、対立するP'、つまり「老年」へと移行する。寺村 (前掲) はQについて「Pが、P'に移行すれば実現不可能または困難になるような事態であるという含みがある (p. 145)」ことを指摘している。更に、第一タイプのPとして典型的に現れるのは形容詞であり、語彙的に対立する表現がない場合に、否定表現が用いられる (「温かいうちに」:「冷めないうちに」) と述べている。一方、Qは、ある時期を次に来る時期と不連続で対立するものとして主観的に表す情意的表現である。それに対して、第二タイプのPウチニQは、Pという事態が進行して思わぬ方向へ発展し、Qという事態になったことを表す (例:「はじめは嫌な奴だと思っていたが、付き合っているうちに彼の良さがわかった」)。第二タイプのPは専ら動詞の「ている」形をとり、Qは事実を描写する表現から成る。更に、寺村 (1983) では、両タイプの共通性はQをそうでない事態と対立させるところにあるとしている。

笠松他 (1993) は、「うちに」と「あいだ (に)」を比較しながら、それらの共通点として主文の出来事と従属文の出来事の同時性を表すことを挙げている。その同時性は「うちに」及び「あいだに」の場合は部分的で、「あいだ」の場合は全体的である。「うちに」のもう一つの意味特徴は、主文の出来事が従属文の出来事に依存しているという場面的条件づけを有する点である。笠松他 (1993) は更に、場面的な条件づけを主体的なものと同体的なものに分類する。前者 (例:「熱いうちに、いただきます」) は寺村 (1983) のタイプ1に、後者 (例:「歩いているうちに、肌が汗ばんでくる」) はタイプ2に該当する。

表2 「うちに」「あいだ (に)」による従属文・主文の接続方法の表現  
(出所: 笠松他 1993: 144、「—」は筆者)

|              | 同時性の性格 | 全体的な同時性 | 部分的な同時性 |
|--------------|--------|---------|---------|
| 場面的条件づけのありなし |        |         |         |
| 場面的な条件づけがない  |        | あいだ     | あいだに    |
| 場面的な条件づけがある  |        | —       | うちに     |

瀬戸 (1995) によると「内外」のメタファー表現における「内」と「外」は比較的明瞭な境界によって仕切られていることが多い。「内外」のメタファーは「遠近」及び「中心・周縁」メタファーと深く関わっている (以下の図1を参照)。

「中心・周縁」概念は無段階的な濃淡を有する連続的なものである。一方、「遠近」は中心から「内々」の領域を出て「周縁」に至るまでの距離を示す。「遠近」によって「内」の領域に「内々」という親密な空間があることが示される。この領域は最も親しく、よくわかっている部分であり、故に「熟知」した領域である。中心から見た、周縁を越境した領域は「未知」の世界に属する。それに対して、周縁の内側が「既知」の領域である。

上記の通り、瀬戸 (1995) は「うち」の様々な表現を分析対象としながら、「うち」の個々の意味の関わり方を示そうとしたものではない。それに対して本稿では「うち」の各表現を分析した上で、「うち」における意味拡張の仕組みを示すことにより、意味間の相互関係を記述することを目指す。

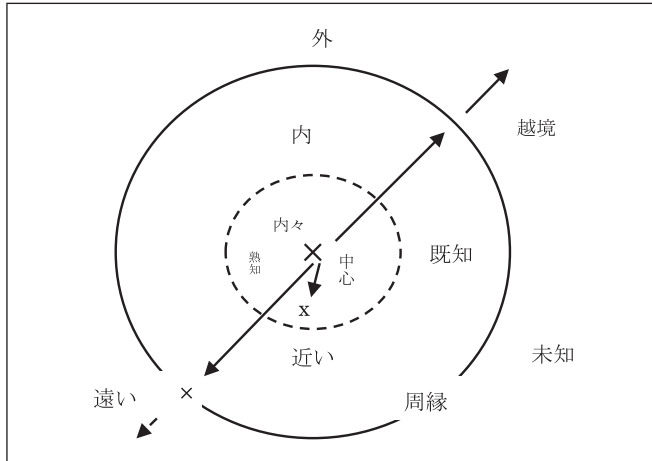


図1 「内外」の周辺 (出所：瀬戸 1995: 163)

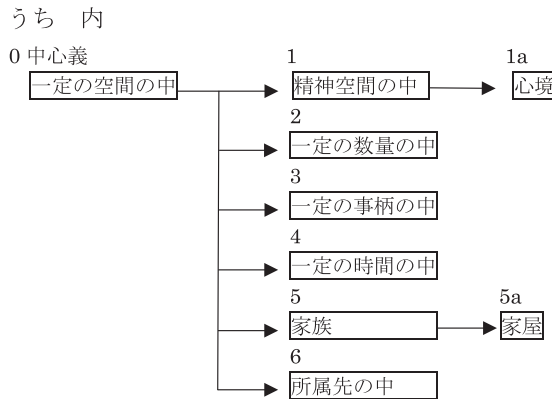


図2 「うち」のネットワーク図 (出所：荒川 (編) 2011: 55)

荒川 (2011) は日本語学習者向けの学習辞典における記述として、「うち」の各意味を上記の図2の通りに分類し、ネットワーク図として示している。同書は、0の「一定の空間の中」を派生の起点となる中心義とし、1～6の各意味を一次派生義として、更に1a及び5aを1及び5の各意味からの二次派生義として位置付けている。

荒川 (2011) は学習辞典であるため、意味拡張がメタファーによるものか、メトニミーによるものかなどの意味拡張の方法を記述対象としていない。また、「うち」の時間的意味を取り上げているが、「練習しているうちに慣れてきます」タイプの用法については触れていない。更に、「うちらは平均十二時間は働いている」のような人称を表す場合についても言及があるのみで、ネットワーク図におけるその位置付けがなされていない。本稿はこれらの意味を含む意味ネットワークの記述を目指す。

以上見てきた寺村 (1983) 及び笠松他 (1993) は「うち」の時間的な意味を記述している。一方、瀬戸 (1995) は〈遠近〉〈中心・周縁〉との関わりを示しながら、メタファーとしての「うち」の

特徴について述べている。寺村（1983）及び瀬戸（1995）は、「うち（に）」によって規定される範囲がその範囲外（すなわち外）と対立的に捉えられる点に着目している。一方、笠松他（1993）は「うちに」の部分的な性格と「うち（に）」を含む従属節の主節との関わり方に注目している。

本稿では、「うち」の時間やその他の要素へのメタファー的意味拡張の仕組みを明らかにし、その際に〈容器〉、〈遠近〉、〈中心・周縁〉、〈全体・部分〉というイメージ・スキーマが担う役割について考察する。

### 3. 本論の理論的枠組み

表1の『広辞苑』の記述からも明らかなように「うち」には複数の意味があり、多義的である。Langacker（2008: 37）は多義語について、ある程度慣習化された複数の意味が関わり合っており、それらの中には中心的なプロトタイプの意味と個々の意味において精緻化されるスキーマ的意味があること、更には意味同士がカテゴリー関係によって繋がり、ネットワークを形成することを述べている<sup>4</sup>。ネットワークにおけるスキーマの意味について早瀬・堀田（2005: 71）は「スキーマとは、具体例とプロトタイプの双方と両立するような、細部の捨象と抽象化を行った結果得られる共通性のことである」と定義しており、更に「スキーマは（中略）自然言語に繰り返し見られる規則性をも捉えるものであり、ネットワーク形成の中でも重要な位置を占める概念である」と指摘している。

プロトタイプからの拡張の一つの方法としてメタファーが挙げられる（Lakoff 1987, 435-436、早瀬・堀田 2005: 119）。Lakoff and Johnson（1980: 5）はメタファーを、ある物事（Y）が他の物事（X）を介して理解・経験される仕組みとして定義している。その定義からも示唆されるように、意味の理解が困難な抽象的な事柄の把握は、より具体的な事柄を介して行われる。メタファー的に意味が拡張される際には、起点領域と目標領域の間に何らかの類似性がある（Lakoff and Johnson 1980, 148-155）。

Johnson（1987: 107）は、多義語に関連し合った複数の意味があることの理由として、具体的な領域からより抽象的な領域へとメタファー的に拡張されるイメージ・スキーマがあることを挙げている。「うち」を例に考えれば、瀬戸（1995）が取り上げている、〈中心・周縁〉及び〈遠近〉はこのようなイメージ・スキーマである。本稿では、〈容器〉及び〈全体・部分〉も「うち」の多義性を動機づけているイメージ・スキーマとして考える。Johnson（1987: 29）はこのようなイメージ・スキーマについてパターン化・規則化された認知図式と定義し、それらによって人間の行動、知覚や概念の体系的把握が可能になるとしている<sup>5</sup>。イメージ・スキーマ変換は意味拡張の際に重要な役割を果たす。Lakoff（1987: 440-444）では、イメージ・スキーマ全体から部分への焦点の変換（path → end of path）や対の一方から片方への変換（multiplex → mass）などをイメージ・スキーマ変換と呼んでいる。

意味拡張には他にもタイプがあり、その一つがメトニミーである。初山（2002: 76）はメトニミーを「二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念（X）を表す形式を用いて、他方の事物・概念（Y）を表すという比喩」として定義している（括弧内は筆者）。また、山梨（1988: 93）は、XとYの関係として空間的な隣接性、近接性、共存性、時間的な前後関係、因果関係を挙げている。更に、山梨（1988: 93-94）では、換喩（メトニミー）の典型例として容器—中身、材料—製品、主体—手段、主体—付属物、作者—製品、原因—結果が挙げられている。

以上見てきた意味拡張の仕組みを基に、以下において「うち」のプロトタイプの意味とその他の拡張の意味について考察し、最後にそれらの相互関係、すなわち意味ネットワークを明らかにしたいと思う。

#### 4. 「うち」のプロトタイプの意味とスキーマの意味

あるカテゴリーの代表例・典型例がプロトタイプと見なされ（早瀬・堀田 2005: 17）、拡張はプロトタイプから同じカテゴリーの他の成員に対して行われる（早瀬・堀田 2005: 31）。初山（2002: 107–108）はプロトタイプの意味を多義語の複数の意味の中で最も基本的な意味と定義し、その意味には用法上の制約がない、あるいは少ないということを指摘している。従って、多義語がプロトタイプの意味を表す時は修飾要素を伴わずに、文中に現れることが可能である（前掲、p. 162）。

以下の例 1、2 の「うち」は最も具体的な空間の意味を表し、しかも修飾要素を伴っていない。その上、後述するように「うち」の意味拡張はこのような典型的な空間の意味からより抽象的な時間的な意味などに対して行われる。従って、これらの「うち」はプロトタイプの意味を表すものと見なすことができる<sup>6</sup>。

- (1) 煎り豆は旧暦の月の数だけ小石をませ、ヒイラギの枝で煎り、その豆を神様に供え、家族は年の数だけ豆を食べ、残りの豆を「福は内、鬼は外」と唱えながら撒く。（富岡典子「大和の食文化」）
- (2) 窓の可動部は内か外か（碓井民朗「一流建築家の知恵袋マンションの価値 107」）

上記のいずれの例の場合もある境界によって区切られた空間が想定され、指示対象がその境界の中にあることが表現されている。内と外の対比的把握には境界が不可欠である。指示対象の位置が境界内でありさえすれば、中心寄りか否かが問題にならないこともわかる。以上のことから、「うち」のプロトタイプの意味として〈ある空間の区切られた境界の中〉を抽出することができる。

第3節で取り上げたようにスキーマの意味とは各拡張された意味に共通する意味である。故に、スキーマの意味の抽出には各意味拡張を分析する必要がある。本稿では、プロトタイプの意味を手掛かりに「うち」のスキーマ的な意味は〈境界の中〉であるという仮説を立てる。つまり、以下の図3のようにx1、x2、x3、x4という境界に区切られた斜線で示すxというある領域の中に、指示対象yが包囲されていることを表すとす。図3では便宜上yを点として示したが、yの包囲の仕

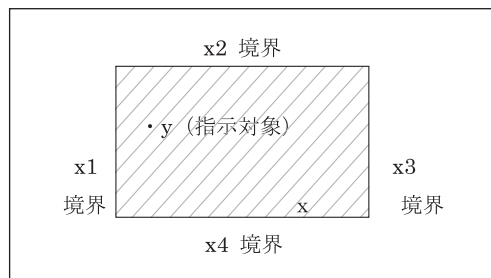


図3 「うち」のスキーマの意味

方は全体的であっても、部分的であっても良い<sup>7</sup>。重要なのは、yの位置が境界の中にあることである。図3からも明らかなようにxを〈容器〉と見なすことができ、yがその〈容器〉の中にあると捉えることができる<sup>8</sup>。なお、図表化のため便宜上四角い形で示したが、境界に囲まれてさえいれば、xの形状は問題ではなく、丸い場合であってもよい。それ故、境界の数も4つでなければならないわけではない。

以下の節において、空間以外のものに対する意味拡張について考察し、最後にスキーマ的意味についての仮説を検証する。

## 5. 「うち」のその他の拡張的意味

空間以外への「うち」の意味拡張は、人、区分を持つもの、時間において見られる。以下においてそれぞれについて考察していく。

### 5.1 人への意味拡張

本節で、「うち」の空間的意味が人に関わる事柄に拡張する場合について考察する。

#### 5.1.1 〈容器〉としての「家」

「うち」は、次の例3、4のように人の住む空間としての家を表すことができる。この場合、スキーマ的な意味の境界は家の物理的な壁として表現される<sup>9</sup>。プロトタイプの意味の〈ある空間の区切られた境界の中〉に近い意味が表現されるが、「家」そのものの表現は、〈境界内〉から境界（容器）そのものへとイメージ・スキーマ変換が起きたことによるものと考えられる。この変換はメトニミー的拡張である。山梨（1988: 94）では「容器—中身」は日本語においてよく見られるメトニミーの一つとされている。家は中に人が住む一種の〈容器〉と見なすことができるので、本稿では〈容器—中身〉のバリエーションとして扱う。この場合、区切られるのは単なる空間ではなく、人の生活の拠点であり、ダイクティック・センターとしての特別な空間である。

- (3) 「名前は何と言ったっけ、君の婚約者？」 部長が言う。「木田麻子と申します」「ああ、そうか。一度うちへ二人で来なさい。その時、家内にも会って…。式は秋だって？—じゃあ、いろんなことは、また今度」 そう言って、部長は席を起った。（河野多恵子「秘事；半所有者」）
- (4) 一つには、おかあさんの実家がうちからそれほど遠くないところにある。（角田光代「キッドナップ・ツアー」）

#### 5.1.2 「家」を生活拠点とする「私」と「私の家族」

『広辞苑』の記述にもあるように、「うち」は人の住まいとしての建物はもちろん、その住まいに住む自分自身（＝話し手）を表すためにも一人称表現として、とりわけ関西方言において例5、6のように用いられる。一方、例7のように複数形で現れると、単数形より使用範囲が広いと言われる。更に、「うち」は共通語でも若い女性の一人称として使われる。

この場合、スキーマ的意味〈境界の中〉の境界（〈容器〉）は「家」で、その中に住む居住者（〈中身〉）として「私」が把握される。故に、この意味拡張は、〈容器〉から〈中身〉へのイメージ・スキーマ変換により生じたものと見なすことができる。

- (5) 塾の友だちから、ある日突然イジメられたのです。でも、その時はイジメを受けているということを、親には言えませんでした。それでただ、母に「塾の日時をかえたい」とだけ言いました。すると母は、とてもきびしく私を叱ったのです。それで私は「ウチがどんな目にあってるかわからんくせに、勝手なこと言わんといて！」と言いました。(高野彩子「My Birthday」)
- (6) 「ウチ」って言葉は関西系なんですか？特に、自分のことを「ウチ」とか、へりくだって使いませんか？標準語かと思ってましたが、「ウチ」って「関西やね」とかって、精神科専門病棟で、軽いいじめに合いました。自分の家という意味で「うち」って言う時もあるし、自分を指して「うち」って言う時もあります。四国在住。(Yahoo! 知恵袋)
- (7) 店員を見つけたうちらは、もっと在庫があるかどうか聞いてみました。(Yahoo! ブログ)

以下の例の「うち」は「うちの家族(・家庭)」に言い換え可能である。そのことが示している通り、「うち」は住まいを共有する家族を表すこともできる(例8、9)。この場合、「自分の家に住む私」と「同じ家を共有する家族」は隣り合っていると考えることができ、因ってメトニミー的に意味が拡張していると見なせる。このように家族を表す「うち」は「うちの+ (関係性を表す親族名称など)」の形で「うちの子」「うちの母」「うちの奴 (=妻)」「うちのだんな」などのように家族のメンバーやそれに準じたペットなどを表すために頻繁に使われる(例10)。

- (8) 「いやだ、ごめんなさい、泣いたりして、なんか馬鹿みたい。どんな家かと思われちゃうわよね。あの、うち別に何か問題があるとかじゃないの、仮面夫婦だとか、そういうんじゃないくてーやだ、変なこと言ってる」女は泣きながら笑った。(角田光代「人生ベストテン」)
- (9) 「うちなんか、亭主はつぶれそうな会社にいるけど、いないよりはマシだわ」(唯川恵「青春と読書」)
- (10) お巡りさんは「こいつはウチのやつでして…」と弁明するがサザエさんはますます怒り、妻に向かってこそ「オイ、コラ」とは何だ、と詰め寄るのです。(樋口恵子「毎日新聞」)

### 5.1.3 所属先

更に、「うち」は話し手が所属する会社や組織などを表す場合もある(例11では会社、12ではプロ野球球団)。生活拠点としての家と社会的活動の拠点としての会社などの組織は共に「所属先」としてのダイクティック・センターを表す点で類似的である。前者は「心理的うち」、後者は「社会的うち」と呼ばれる場合もある。一方、生活拠点としての「うち (=家)」は「彼のうち」のように一人称の「私の家」以外の「家」を表すためにも用いられるのに対して、「うちの会社」と呼べるのは一人称主体の会社に対してだけである。社会的活動の拠点を表す所属先としての「うち(の会社)」は「私」という〈中身〉のもう一つの〈容器〉と見なすことができる。故に、この拡張は〈中身〉から〈容器〉へのイメージ・スキーマ変換による。つまり、スキーマの意味の〈境界の中〉から〈境界〉そのものへと焦点が移る形で精緻化が起きている。

- (11) 機器選定はコネクターから制御盤の選定まで特殊だ。しかし、具体的にはどのような物があり、いくらぐらいする物なのかわからない。(中略) 客先はというと、「ウチではそんなの常識だから、そちらで調べてください。ただし、検査は通ってもらわなければ困



りますから」と素っ気ない。(中森勇人「SEとして生き抜くワザ」)

- (12) マリナーズ・佐々木投手の日本復帰について「帰って来てほしい。電話で報告したオーナーも前向きだった」と早々と獲得に意欲を見せ、山下監督も「横浜の功労者。もう一度うちで野球界に貢献させたいと思っていた」とラブコールを送った。(「北海道新聞」)

瀬戸(1995)が指摘しているように「うち」が生活空間としての住まいを介して一人称である「私」や「家族」、更には「会社」やその他の所属している集団に拡張される際に、〈中心・周縁〉、〈遠近〉のイメージ・スキーマと〈境界性〉が相互作用し、様々な〈距離〉を表すことが可能になる。無論、〈中心〉に居るのは「私」で、その「私」の最も近くに「家族」がいる形となる(瀬戸1995の「内々」)。このように「会社の同僚」や「学校の同級生」「サークルの友達」「知り合い」「知り合いの知り合い」などと相対的に様々な心理的距離が表現可能になる。一方、境界の〈外〉は「私」から〈遠い〉心理的空間として把握され、それ故その空間にいる人々は「私」から見た外集団のメンバーとして位置付けられる。このように日本社会における内集団と外集団の区別はこの〈内・外〉メタファーに起因すると言える。

#### 5.1.4 内面的事柄

「うち」を用いて「胸の内」「心の内」などの人の思いや感情といった内面的事柄を表すことができる。荒川(2011: 56-57)はこの意味を「精神空間の中」から派生した「心境」として位置づけている。この場合の思いや感情などは内面的要素であるので、(境界の)外からは見えない。容易に把握し難い抽象的なこのような内容の表現に「うち」が〈容器〉から〈中身〉へのイメージ・スキーマ変換によって拡張されている。この場合も、〈境界の中〉というスキーマの意味が維持されており、〈容器—中身〉、あるいは〈全体(=人)—部分(=感情など)〉の構図が見出せる。

- (13) 川越へ帰るのは当然であるが、平七郎の心のなかに依然として蟠っているのは、志津の本当の胸のうちであった。憎しみを抱かれたまま別れたくないという気持ちの裏には、志津はきつと過去のことは許していると思いたいからであった。(押川國秋「螢の舟」)
- (14) マリアの内なる“元気”にくらべて、都会に生息する“元気”がいかに曖昧なものがよくわかる。(八坂裕子「COSMOPOLITAN 日本版」)
- (15) 響きの上での厳格さと、内に秘めた響きの上での厳格さと、内に秘めた激情との絶妙のバランス。(杉田望「アカハラ」)

以上見てきたように、5.1.1から5.1.4まで取り上げた全ての意味に共通する要素として図3のスキーマを抽出することができる。各意味においてイメージ・スキーマ変換やメトニミー的な拡張により、スキーマが精緻化され、〈容器〉そのもの、あるいはその中身が焦点化されるのである。

「家」のように四方が境界に囲まれる対象以外へも「うち」が拡張できる。以下の5.2において、境界に囲まれた〈容器〉が〈全体〉を表し、その中身としての〈部分〉が焦点化される場合について考察する。

## 5.2 区分を持つものへの意味拡張

「うち」の意味拡張の一つのパターンとして、図3のxとyがそれぞれ全体と部分を表す場合が挙げられる。〈全体・部分〉構造を有するこのタイプの代表的なものに数量的表現がある。以下の

例 16、17、18 はその例で、「うち」に先行する二重下線部は全体  $x$  であり、一方波線部はその中の部分としての  $y$  を表している。

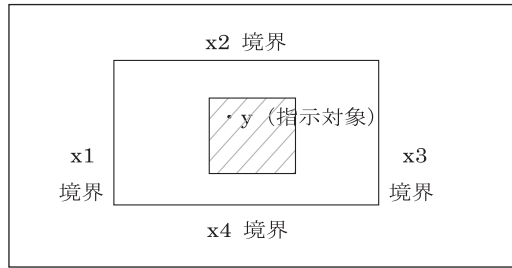


図 4 区分を持つものへ拡張した場合<sup>10</sup>

- (16) 先に国土交通省が行った調査によると、公共工事が減少した建設業界では中小・中堅業者四百八十社のうち、百社近くが環境に配慮した新素材の開発などの環境リサイクル分野に進出していた。(産業経済新聞社宮野弘之・村上健治「産経新聞」)
- (17) 東京で暮らす地方出身の若者たちは星の数。そのうちの百人ほどが登場する本書は、百葉の「カメラ目線」の肖像写真と、百篇の短い聞き書きの文章から成っている。(別役実他「週刊現代」)
- (18) 一年三百六十五日のうち、三百五十日は実験に必要な装置類を作り続け、残りの十五日間で実験データを取るという生活であったように記憶している。(大見忠弘「復活！日本の半導体産業」)

全体として提示される  $x$  は例 16 及び 18 のように明確な場合もあれば、例 17 のように漠然としか規定されていない場合もある。いずれの場合も閉集合と見なすことができ、 $y$  が〈部分〉としてその〈全体〉に包囲されている。この場合、〈全体〉としての閉集合がいわば境界を有する〈容器〉として把握され、〈部分〉はその〈境界の中〉にある〈中身〉として把握可能である。前述したように〈全体・部分〉はイメージ・スキーマである。

〈全体・部分〉構造はカテゴリーにおいても見出せる。以下の例 19 の「上場企業」、例 20 の「森林」は総称名詞であり、総称により表現されるカテゴリーには多くのメンバーが含まれる。それらの集合全体が  $x$  で、波線部の下位集合が  $y$  として表現される。なお、このタイプの場合、総称名詞が表す集合の中の何らかの特徴を共有する下位集合が  $x$  で、その更なる部分が  $y$  として焦点化されることが多い。上記の例 19、20 では  $x$  の全体集合は二重下線の連体修飾句によってある特徴を有するものに限定されている。

- (19) 九十九年から二千年にかけて債権放棄を受けた上場企業のうち、新聞発表等により人員削減計画の把握が可能である十四社の人員カット率(削減予定従業員数/全従業員数)の平均は二十一・五%であった。(「平成 13 年版経済財政白書」)
- (20) 良質な水、山地災害等に対し安全かつ安心な生活を確保するため、水源かん養機能等の公益的機能の発揮に対する要請の高い森林のうち、森林所有者等が自助努力を行っても林業生産活動のみでは適正な整備が進み難い森林について、その適正な整備が必要な場

合には、治山事業や緑資源公団による対応により必要な整備を行うほか、森林所有者等からの施業や経営の受託によるものを含め森林整備法人等が行う森林の整備を推進する。(「平成14年度森林・林業白書」)

以上見てきた区分を持つものへの意味拡張の場合「うち」は〈部分〉の限定に用いられている。「うち」は「うち」または「うちの」という形をとる。xは「xのうち(,) y」「x。うち、y」「x。その／このうち y」の形で現れる。このような全体への「うち」の意味拡張は〈全体・部分〉構造を成すものに対して広く行われる。助数詞を伴う人数、回数、件数など、更には、費用、人口、国、地域など部分に分けて捉えられるものあるいは、複数のメンバーから成る集合として捉えられるものへの拡張は容易に行われる。集合は複数の区分により形成されるので、対象となるのは数えられる、つまり区分として把握可能なものである。時間も量的に解釈される場合にその対象となり得る(例18)。とりわけカレンダー式時間は、「年」「月」「週」「日」「午前・午後」「朝・昼・晩」などの様々な単位に下位区分可能なため、〈全体・部分〉構造を取ることができる。

区分を持つもののパリエーションが以下の「～も～のうち」の形をした表現にも見られる(例21～23)。波下線部のyを二重下線部のxの範囲内に入るものとして認める表現である。つまり、yがxとしての特徴を持ち、xに該当するので、xとして認めることができることを表す。xの典型的メンバーでないyに対して使われるので、yがx集団の〈中心〉から〈遠く〉、〈周縁〉(=境界)に近いものとして特徴づけられる。この場合、例23のように強調表現「～までもが～のうち」の形をとると、典型から〈遠い〉yによって〈中心〉から〈周縁〉までの幅の広さが強調される。

- (21) 試練も人生のうち。(実著者不明「会社がなぜ消滅したか」)
- (22) 一枚、一枚と葉を置いてみると、同じ木の葉なのに色の変化にどれも少しずつ違いがあって、並べたときのバランスを考えながらあれこれ迷い、選抜に思わぬ時間を費やすことも楽しみのうち。(原田昭子「庭の押し花」)
- (23) ジュワツという音。立ちのぼるゆげ。広がる香りまでもがごちそうのうち。(脇屋 友詞「脇屋友詞のおもてなし家郷菜」)

以上見てきた数量的対象、時間、カテゴリーなどの集合は言うまでもなく空間ではない。つまり、元々プロトタイプの意味において空間的位置表現だった「うち」がメタファーとして空間でない対象に拡張されているのである。この拡張は、起点領域である空間から、目標領域の区分を有する対象に「うち」のスキーマ的意味〈境界の中〉が写像されることによって実現される。区分を持つ対象は本来プロトタイプの意味のような明確な境界を有しているわけではないが、その対象を構成する複数の部分がいわば閉集合を作るので、区切られた領域として把握可能である。この全体がいわば〈容器〉の役割を果たし、部分的対象が〈容器〉を成す境界に包囲されると捉えることができる。部分の焦点化は、メタファー拡張後に目標領域において起きる〈容器〉から〈中身〉へのイメージ・スキーマ変換によるものと考えられる。従って、この意味拡張も図3のスキーマ的意味の精緻化によるものとして捉えられる。

### 5.3 時間への意味拡張

スキーマ的意味のxとyのいずれかまたは両方が出来事の時間を表す場合を本節で扱う。「うち」

の時間への意味拡張は空間から時間へのメタファー的拡張である。抽象的で把握しにくい時間概念の理解に具体的で把握しやすい空間概念がメタファーとして使われることは頻繁にみられる現象である。時間が、方向性を有した水平に流れる線上のものとして把握されるので、この場合スキーマ的意味の上下 (x2 及び x4) の境界は背景化されると考えられる。

以下において、x と y の関係に着目し、x が y の、成立条件、成立状況、成立時期及び成立期間を表す場合に分けて考察する。

### 5.3.1 出来事の成立条件を表す場合

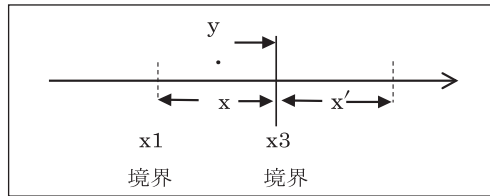


図5 成立条件を表す場合

上記の図の破線は x 及び x' の時間的な幅が明確に定まっていないことを示す。x1 及び x3 はスキーマの意味 (図3) の水平方向の二つの境界を示す。

x が y の成立条件を表す場合は x に特徴がある。その特徴とは時間の経過と共に x が異なる状態 (図5の x') に必然的に移行してしまう可変的な状態であることである。x が限界に到達し、x' に移行するのはいつなのかは定かではないが、x' は時間の経過と共に否応なく到来する x の後続段階である。この場合、y の成立は「うち」の境界内、つまり x' になってしまう前で行なければならないことが表現される。すなわち、x3 は y の成立限界である。この場合、イメージ・スキーマ変換により、〈容器〉全体から x3 の境界 (限界) へと焦点が移っている。この精緻化は、空間から時間へのメタファー的拡張後に目標領域において起きたものと判断できる。この場合 y が x 中に実現することが望ましいという話し手の主観的判断が表現される。

x が y の成立条件を表す代表的な構文的タイプに「うちに」がある。寺村 (1983) ではタイプ1として、笠松他 (1993) では場面的条件づけとして扱われた「うちに」の用法である。

以下の例からも窺えるように、後続する段階を有する可変的な事態を表す語彙であれば、「うち」を修飾する語彙の品詞にあまり制限がない<sup>11)</sup>。

- (24) アメリカのサマーキャンプは高校生が参加したりするものもありますが、本当のことを言えば、小学生のうちにやらないとあまり意味はないのです。(戸塚宏「教育再生!」)
- (25) 現在三十二週で、出産までもう少しあるんですが今のうちに入院用品を準備しておこうと思います。(Yahoo! 知恵袋)
- (26) 区内ではごみのポイ捨てが目立つことから、講師役の中央清掃事務所職員は「若いうちにモラルを身につけて」と、参加者に熱いまなざしを送っていた。(「北海道新聞」)
- (27) 値段をつけるなら、生きているうちにして欲しかった。(久世光彦「女神」)

笠松他 (1993) が指摘しているようにこのタイプの場合 x に対する y は部分的である。事態の成立時間を時点として捉える格助詞「に」の共起により、スキーマ的意味の x3 が限界と

して焦点化されると考えられる。つまり、 $x_3$ が $y$ の成立の限界点であることを表すのに「に」も重要な役割を果たしている。そのことが「に」の省略が不可能なことからも窺われる。

### 5.3.2 出来事の成立状況を表す場合

$x$ が $y$ の成立状況を表す場合、 $y$ の実現の仕方には二つのパターンがある。一つ目は、 $y$ の実現に時間がかかったり、困難だったりすると話し手が想定する場合で、もう一方はその実現が予想以上に早かったり、いつの間にか起きていたりする場合である。いずれの場合も $y$ は制御不能な事態であり、 $x$ は $y$ の成立の仕方や状況を描写する役割を果たす。この場合 $x$ は、 $y$ の成立の仕方の表現に欠かせない役割を果たしている。従って、空間から時間へのメタファー的な意味拡張後に、イメージ・スキーマ変換により $x$ が焦点化されていると判断できる。

前述したように寺村（1983: 146）はこのタイプについて、 $P$ という事態が進行して思わぬ方向へ発展し、 $Q$ という事態になったことを表すと述べている。更に、 $P$ は専ら動詞の「ている」形をとるとし、 $Q$ は事実的であると指摘している。

このタイプを以下のように図表化できる。図6の $y'$ は、 $y$ の実現以前の姿を表している。 $x$ に対して $y$ は部分的である（但し、例31のように $x$ が極めて短い期間である場合もある）。 $x_1$ 及び $x_3$ はスキーマの意味（図3）の水平方向の境界である。図の破線は $x$ の幅が明確に定まったものではないことを示す。

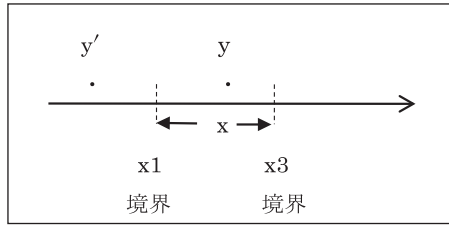


図6 成立状況を表す場合

$y$ の実現に時間がかかることを表す典型的な例として例28、29が挙げられる。 $x$ （例の二重下線部分）は繰り返し行われるマクロイベントであり、この出来事の束が時間帯として把握される。 $y$ （例の波下線部分）は実現に時間がかかったり、困難だったりする（・した）と話し手が想定する出来事であり、 $x$ のマイクロイベントの繰り返しが $y$ の実現をいわば誘発する。このようにマイクロイベントが繰り返し行われている期間中に $y$ が自ずと生起することが表現される。

- (28) 最初は慣れるまで難しいと思いますが、練習しているうちに慣れてきます! (Yahoo! ブログ)
- (29) 初校、再校、三校と校正を重ねているうちに何とふさわしい題名だろうと思えるようになった。 (織田紀江「宝石函」)

この場合の $x$ は典型的には寺村（前掲）が指摘しているように、動詞テイル形で現れ、反復相のアспектを取る。しかし、 $y$ の実現に時間がかかったり、困難だったりすることはテイル形以外の表現で表される場合もある（例30）。

- (30) オスは一羽また一羽と死んでいきました。あわてた日本政府は中国政府に頭を下げて、種付け用のオスを一羽借りてきました。しかし、期待もむなしく、種付けは失敗してしまいました。そこで、今度は日本のメスを北京動物園に預けましたが、やはりうまくいきません。そうこうするうちにトキも年をとり、オスとメスのそれぞれ一羽になってしまいました。(中村幸昭「鳥羽水族館館長のジョーク箱」)

一方、後者のタイプつまり、実現が予想以上に早かったり、いつの間にか起きていたりする場合の  $x$  は「名詞のうちに」「動詞(否定)のうちに」などの形をとる。例 31、32 は  $y$  の実現が予想以上に早かったことを表す例で、例 33 はいつの間にか起きたことを表すものである。このようにいつの間にか  $y$  が実現していたことを表すために「知らない」「気付かない」などの思考・認識動詞の否定形が頻繁に使われる<sup>12</sup>。

- (31) 噴煙は、上空八千メートルまで上がっていた。いっしゅんのうちに、島中の人から観光気分はふきとんでいた。(広鱈恵利子「命を救え! 愛と友情のドラマ」)
- (32) 新人スタッフが入っても、その日に指導に付いたスタッフによって、指示内容が食い違っていることが多々あって、新人さんがそういう状態に嫌気がさして、1週間も経たない内に辞めてしまうという事がよくあるのです。(Yahoo! ブログ)
- (33) もちろん大多数の人は、実践的な目的で経済学を学ぼうとしているはずですが。だがそれによって、西欧形而上学とその批判をも、知らないうちに学んでいることになるのです。(岩井克人「朝日新聞」)

### 5.3.3 出来事の成立時期を表す場合

出来事の成立時期を表すタイプの「うち」には、「～うちから」の形をとるものと副詞化した「そのうち(に)」がある。それらは  $y$  の成立(開始)時期を漠然と表すが、その開始時点や終結時点を明確に表現しない。そのことは「\*11時のうちから」という表現が容認されないことからわかる<sup>13</sup>。このタイプを以下の図7のように図表化できる。この拡張は空間から時間へのメタファー的な拡張後に、イメージ・スキーマ変換により  $x$  の期間、または  $x1$  の境界が焦点化されることにより起きたものと判断できる。図の破線(横線)は  $x$  と  $y$  の幅が明確に定まっていないことを表し、一方、縦線の点線は成立時期が明確に定まっていないことを表す。

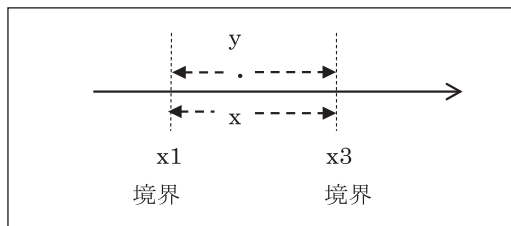


図7 成立時期を表す場合

$y$  の実現が常識的基準や予想よりも早いことを表す場合に「～うちから」型表現が使われる。以下の例の場合、常識的基準や慣例に基づけば、「夜」(例 34)、「年を取ってから」(例 35)、「原因が明らかになってから」(例 36)  $y$  が起きることが暗示される。格助詞「から」の共起により、 $y$

の開始が  $x$  の境界内のものとして示される。常識的・慣例的基準と異なる  $x$  内での開始であることから、「早い」という含意が生じると考えられる。

- (34) 桜の時期ともなれば、それらの場所で相変わらずの花見の宴が今でもさかんになされているし、新入社員らがその場所取りをやらされて、昼間のうちからシートを敷いて陣取りをしては暇つぶしの昼寝をやっているのはまだほほえましいが、夜ともなれば目も当てられぬような無礼講の乱痴気騒ぎが、そこで繰り広げられる。(長沢利明「江戸東京歳時記」)
- (35) 若いうちから守りに入って出費を抑えるようにしていたんなら、何のために生きているのかわからない。(Yahoo! ブログ)
- (36) 自然環境の危機管理は、原因が明確でないうちから対策を取ることが重要だ。(「毎日新聞」)

出来事の成立時期を表すもう一つの表現に副詞化した「そのうち(に)」がある。

- (37) そのうち慣れます。(Yahoo! ブログ)
- (38) 魚は何度かすどく水中を走り、糸の長さに引き戻され、そのうちに疲れきったようで力をなくしてきた。(立松和平「虹色の魚」)

この場合、「うち」は、出来事が実現する区間  $x$  を限定する役割を果たす。その出来事の実現時期を時間軸上に位置付けるのは指示語「その」である。金水・田窪(1992: 137)によると、談話における新規知識の表現に、話し手の経験に基づくものであろうと、未来または非現実のものであろうと、遠称を用いることができないため、中称が用いられる。このような中称は、「ちょっとそこまで」のような用法において近くも遠くもない場所を指し示す(前掲: 138)。時間表現における中称も同様に、特定を避けたそう遠くない未来を表すと考えることができる。例 37 はこのタイプのものである。

更に、「そのうち(に)」には「そうこうしている間」「いつのまにか」という意味がある。例 38 はこのタイプで、過去の出来事  $y$  (「疲れきったようで力をなくしてきた」) の成立時期の局限に先行する一連の出来事が使われている。ここでも漠然とした成立時期の局限が行われている。

「そのうち(に)」の、上述したいずれの用法の場合も中称「その」が指し示す時間は限定を避けた漠然とした時期である。指示語「その」のこのような性質によって「うち」の境界性が弱まり、その結果一語化が進み、副詞化していると考えられる。

#### 5.3.4 出来事の成立期間を表す場合

$x$  が  $y$  の成立期間を表す構文的タイプとして「 $x$  うち(は)  $y$ 」が挙げられる。「 $x$  うち(は)  $y$ 」型の表現は、ある期間  $x$  (「小学生である」「若い」などの期間) の〈全体〉において、主文の事態(下記の例の波下線部)  $y$  が該当することを表す。「うち」が切り取る時間帯  $x$  はある一定の期間に限定されたものであり、つまり区切られている。 $y$  が該当する ( $y$  の成立が必要、望ましいなどと話し手が捉える) のはその区切られた期間内においてである。故に、 $y$  の後にとりたて助詞「は」が頻繁に共起し、「は」の対比性が期間の限定性を強調する役割を果たす。

このタイプを図 8 のように図表化できる。この場合、空間から時間へのメタファー的な拡張が起きた後に、イメージ・スキーマ変換により境界  $x_1$  と  $x_3$  の間の水平的広がり全体が焦点化される。

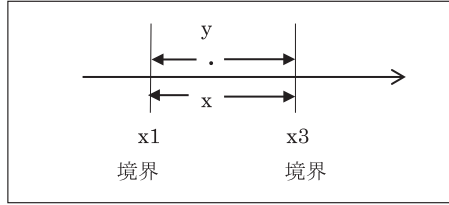


図8 成立期間を表す場合

「x うち (は) y」型の x として例 39、40 のように「小学生」「子供」「幼児」「若い」などの過ぎてしまうものとして把握される期間が現れることが多く、その区切られた期間中に成立する（すべき）ものとして y の意味づけがなされる。例 39、40 の y はそれぞれ名詞述語及び形容詞述語で表現されており、その成立（が望ましい期間）は「うち」の期間（全体）に広がっている。一方、例 41 のように y として否定意志表現が主文に現れる場合、「x の間はずっと」ということを表すために「うち」の境界性が生かされる。動詞に後続している例 42 では、内と外の対比により、x の限定性が強調されている。

- (39) 中学生になって徹底的に勉強に打ち込めるように、小学生のうちは人間性を鍛えることが必要なんです。(戸塚宏「教育再生！」)
- (40) 「若いうちは苦勞した方がよい」(林知己夫「心を測る」)
- (41) 「わしの目の黒いうちは土居を名人にさせない」(斎藤哲男「将棋戦国史」)
- (42) 「そんなことをして恥ずかしくないのか」とお叱りを受けそうだが、この言葉ですら「言われているうちは花」と言い返してしまう。(中森勇人「関西商魂」)

以上見てきたように「x うち (は) y」型の表現の場合、y が x という期間全体を占めることが表される。このような場合、「うち」を「あいだ」に置換可能な場合も多いが、限界性が感じられる場合に「あいだ」より「うち」が選択される。

「x うち (は) y」型表現の x として「最初の」「はじめの」そして動詞否定が頻繁に現れる。多くの場合 x の終了と共に、y が y' という別の事態（反対の事態や肯定的な事態）へと移行する。「うち」の境界性によって y の生起が x に限定されたものとして表現され、内外の相違がより一層強調される。

- (43) 三五郎の居間の整理にかかった。最初のうち息子たちと一緒に動いていた麦子は、なんだか根気がつかぬ様子で、「男の持ち物はわからないから、あんたたちにまかせよ」とソファに腰掛けてぼんやりしていたのが、そのうち居眠りを始めた。(加賀乙彦「夕映えの人」)
- (44) 初めのうちは食事も提供されず、厨房へ行って自分で探して食べなければならなかった。(吉田郁子「世界にかけた七色の帯」)
- (45) ただし慣れないうちは加減が分らず肘や手首が痛くなったりしますので最初は 8 割ぐらいの力でおこなって、加減が分かったら全力でやってみましょう。(Yahoo! 知恵袋)



以上見てきたように「x うち (は) y」型の表現の場合、y は x の境界内の〈全体〉を占める。「うち」の境界性により y の成立期間が限定されたり、境界内の時間と境界外の時間が対比的に捉えられたりする。この場合、図3のスキーマ的な意味は、水平に流れる時間に合わせて目標領域において精緻化され、x1 と x3 の間の水平的広がりがある成立期間として焦点化される。

以上、時間への意味拡張の様々なタイプについて見てきた。いずれの場合も起点領域である空間から目標領域である時間にスキーマの意味がメタファー的に写像され、その後に目標領域において精緻化される。「うち」の境界性が、y の成立条件、状況、時期、期間の表現に重要な役割を担っていることが明らかになった。

以上の考察から示されたように図3のスキーマの意味は目標領域において精緻化されるものの、〈境界の中〉という共通性は全ての用法において保たれている。〈容器〉の立体的な性格がそのまま維持される人への拡張の場合と異なり、時間への拡張の際に指示対象は水平に広がるものとして把握される。故に、時間にメタファー的に拡張された後に、目標領域において精緻化が起き、水平方向の境界、すなわち図3の x1 及び x3 のみが前景化し、x2 及び x4 は背景化する。更に、イメージ・スキーマ変換により境界または境界間の広がりがある焦点化され、その結果、限界性、〈全体〉などの意味が生じる。区分を持つものへの拡張の際にも、スキーマの意味が維持されるが、イメージ・スキーマ変換により、境界内の〈部分〉が焦点化される。

## 6. 「うち」の意味ネットワーク

以上、「うち」の諸用法を分析し、プロトタイプの意味がスキーマの意味を介して各意味にどのように拡張するのかを見てきた。本節では、それらの相互関係をネットワーク図として示す。

図9の太線はプロトタイプの意味を、破線は經由する上位カテゴリーを示す。

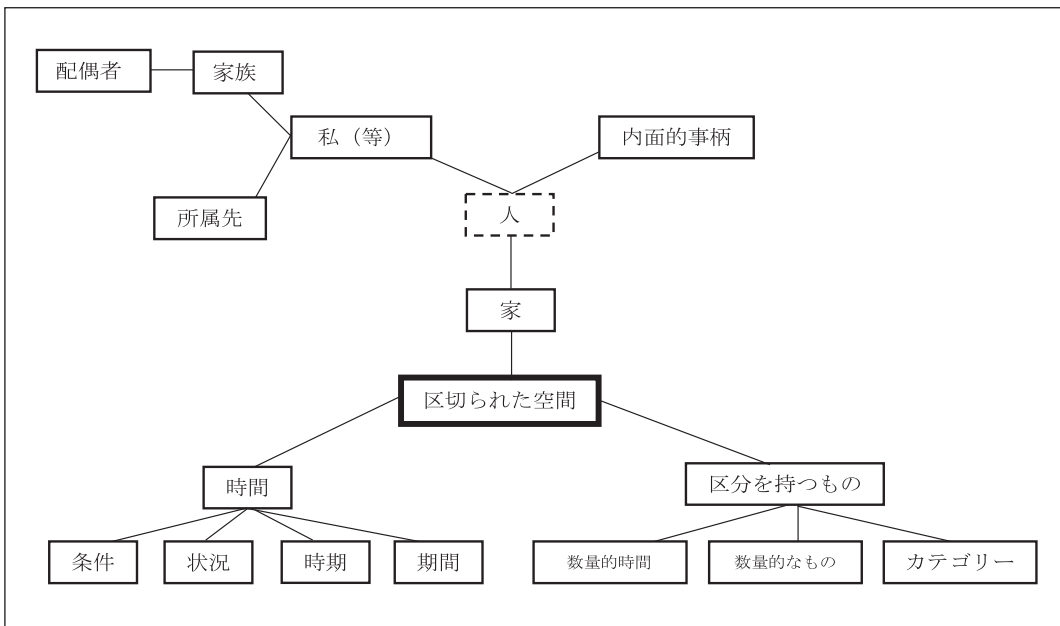


図9 「うち」の意味ネットワーク

「うち」は具体的な区切られた空間としての〈家〉及び抽象的な〈区分を持つもの〉、更には〈時間〉にメタファー的に拡張する。「家」は人の住まいで、中に人が生活しているので、「家」と居住者としての「人」は〈容器—中身〉の関係にあり、「家」(容器)から「人」(中身)へとイメージ・スキーマ変換を介して拡張する。「人」(の体)も一種の〈容器〉であり、「人」の中に「心」や「感情」などの内面的要素がある。故に、「人」(容器)から「内面的事柄」(中身)への意味拡張もイメージ・スキーマ変換によるものと捉えられる。

「人」として具体化されるのは「うち(家)」の居住者としての「私」である。この場合、「人」と「私」は一つのカテゴリーの〈全体〉と〈部分〉の関係にある。「家」から「私」への意味拡張は〈容器〉から〈中身(=居住者)〉へのイメージ・スキーマ変換として捉えられる。「私」から、隣接関係を成す、生活を共にする「家族」やその家族の〈部分〉としての配偶者(「妻・夫」)にも「うち」がメトニミー的に拡張する。所属先を表す「うち(会社)」は〈中身〉としての「私」を包囲するもう一つの〈容器〉として捉えられる。故に、所属先への「うち」の拡張もイメージ・スキーマ変換によると考えることができる。このように〈人〉系統はイメージ・スキーマ変換及びメトニミーによる拡張を通して、一方では、〈部分〉(「人」の部分としての内面や家族の部分としての配偶者など)、他方では〈距離〉(〈中心〉にいる「私」から見て〈近い〉ところにいる家族・配偶者や人が生まれながらに持つ生活拠点としての「家」と比べた場合相対的に〈遠い〉社会的活動拠点としての「職場」等)を表す。

荒川(2011)のネットワーク図では「うち」の意味派生は〈空間〉→〈家族〉→〈家屋〉の方向に進んでいるものとして記述されているが、本稿では〈空間〉→〈空間の一部としての家〉→〈同空間を占める対象としての私(一人称)〉→〈私の「うち」としての家族〉→〈家族の一部分としての配偶者〉という方向での意味拡張として捉える。

具体的な〈家〉系統と異なり、〈区分を持つもの〉及び〈時間〉は抽象的である。これらの場合も、まず空間からそれぞれへのメタファー的に意味拡張が起きる。〈全体・部分〉構造を有する〈区分を持つもの〉は無数にあり、それらの〈部分〉へのメタファーの意味拡張は容易に起きる。区分を有する構造体としての数量的時間(とりわけ、カレンダー式時間)もこの系統の特徴を有するので、メタファーの意味拡張の対象となる。この場合も〈全体〉は〈容器〉として境界の役割を果たし、〈部分〉はその〈中身〉として〈境界の中〉に包囲されると見なし得る。

〈時間〉にメタファー的に拡張した「うち」は時間を区切り、出来事時を時間軸上に局限する。〈時間〉へ拡張されたスキーマ的意味は様々な構文的形を取りながら、出来事の成立条件、状況、時期、期間を表現する。目標領域におけるスキーマ的意味の精緻化はイメージ・スキーマ変換を介して実現する。焦点化される境界の部分や境界内の広がりによって、限界性や幅などが表現される。

以上見てきたように、本論では荒川(2011)と異なり、「うち」の複数の意味は全て直接的にプロトタイプの意味としての空間から拡張するものではないと捉える。空間以外のものへのメタファー的な拡張後に起きるイメージ・スキーマ変換は各領域におけるスキーマの精緻化をもたらす異なるタイプの拡張として捉え得るからである。

なお、意味ネットワークは日本語教育においても応用可能なものである。日本語教科書の中で、「うち」のような多義語の複数の意味は個別に扱われることが多く、新規に意味が導入される際に、先に導入された意味との関連付けがなされないことが多い。しかし、日本語学習者にとって多義語の正確な習得には意味間の関係性の理解が重要である。荒川(2011)では詳細に取り上げられていない、「家」「私」「家族」「配偶者」「所属先」の関係を綿密に提示することにより、正確な言語

運用に欠かせない日本社会・文化におけるウチ・ソト関係に対する理解を形成することができるかと本稿は考える。

## 7. 終わりに

以上、メタファー、イメージ・スキーマ変換及びメトニミー拡張を通して、「うち」の複雑な多義構造が作られる仕組みについて考察した。その結果、「うち」の複数の意味の相互関係を明らかにすることができ、その関わりを意味ネットワークとして示すことができた。

このような複雑な意味体系を有する多義語「うち」の意味ネットワークを明らかにすることにより、相対的位置関係を表す「うち」という語が時間や数量、人間関係などの他の抽象的な概念の理解にどのように生かされているのかを示すことができる。

以上の考察から窺えるように、「うち」の意味拡張にメタファー的拡張のみならず、イメージ・スキーマ変換やメトニミー的拡張が関わっている。後者はダイクティック・センターや視点とも関わっていると推察されるが、その考察は今後の課題としたい。

上述したように意味ネットワークは日本語教育においても応用可能である。〈ウチ・ソト〉は日本社会・文化の理解に不可欠な概念であり、「うち」の意味ネットワークを通してその仕組みの理解が可能だからである。とりわけ「うち」のような形式名詞の場合に、複雑な意味体系を成す上に、その体系的把握を可能にする手掛かりも乏しいので、ネットワーク的提示は語彙指導の方法として有効であると考えられる。「うち」の意味ネットワークの日本語教育への応用方法の検討は今後の課題としたい。

## 注

- 1 後述するように荒川（2011）では時間的意味として成立条件を表す場合のみを取り上げている。人稱的な用法について言及はあるが、ネットワーク図での位置付けがなされていない。
- 2 BCCWJ から採集した 2000 年代の「うち」の用例を参考にする。「うち」の書字形として「うち」「ウチ」「内」が現れるが、本論ではその区別を考察対象としない。その上、本論は詳細なコーパス調査を目的としておらず、また共時的な現象のみを対象とする。
- 3 更に、視点としての内・外及び日英におけるその相違について坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）（2009）において多くの論考が見られる。
- 4 本稿で取り上げる「うち」の意味ネットワークは用法基盤モデルを用いても説明できると考える。後述するように「うち」は〈容器〉として捉えられ、〈容器〉はイメージ・スキーマの一つである。それ故、Johnson（1987）及び Lakoff（1987）に倣い、「イメージ・スキーマ変換が拡張プロセスにおいて重要な役割を担うものとして扱った。
- 5 Johnson（1987: 126）はイメージ・スキーマとして container, balance, blockage, counterforce, restrain, removal, enablement, attraction, mass-count, path, link, center-periphery, cycle, near-far, scale, part-whole, merging, splitting, full-empty, matching, superimposition, iteration, contact process, surface, object, collection を挙げている。
- 6 実質語と異なり形式名詞化した「うち」は、連体修飾句を伴わずに文中に単独で現れることが少ない。形式名詞はこのような構文的特徴を有するため本稿では使用頻度を「うち」のプロトタイプ決定のパロメーターとして扱っていない。
- 7 以下において詳述するが、部分的な場合も全体的な場合もある。
- 8 人間の基本的な認知を支える図式としての〈容器〉の重要性は Lakoff & Johnson（1980: 29–30 他）、

Johnson (1987: 21–23 他)、Lakoff (1987: 272–273 他) により明らかになっている。

- 9 家の壁のみならず、屋根も床も空間を区切る境界の一部と見なすことができる。なお、「家」への意味拡張は言うまでもなく空間的な範疇に属するものである。
- 10 区分を持つものを構成する各区分を何らかの共通特徴を有するカテゴリーのメンバーと捉えれば、その集合を水平に広がる連なりとしてイメージしやすいが、ここでは「うち」の境界により区切られる〈全体〉の〈部分〉であることが肝要であるため、図3になるべく近い形で図表化する。
- 11 「うちに」の修飾語として典型的には形容詞が現れることが前述した通り寺村 (1983) において述べられている。
- 12 「知らず知らずのうちに」もこのタイプの例である。
- 13 「\*」は非文法的であることを示す。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり査読者の先生方から貴重なコメントを賜った。ここに記して心より感謝を申し上げる。

## 参考文献

- 荒川洋平 (編) (2011) 『日本語多義語学習辞典 名詞編』アルク
- 笠松郁子・菅原厚子・鈴木美都代・登野城ルリ子 (1993) 「同時性をあらかず時間的なつきそい・あわせ文—『あいだ』と『うち』—」言語学研究会 (編) 『言葉の科学』6: 141–177, むぎ書房
- 木原恵美子 (2020) 「メトニミーとシネクドキ」池上嘉彦・山梨正明 (編) 『認知言語学 II』pp. 223–252, ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則 (1992) 『日本語研究資料集【第1期第7巻】指示詞』ひつじ書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 砂川有里子 (2000) 「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化—」青木三郎・竹沢幸一 (編) 『空間表現と文法』pp. 105–142, くろしお出版
- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』海鳴社
- 坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』開拓社
- 寺村秀夫 (1983) 「時間的限定の意味と文法的機能」渡辺実 (編) 『副用語の研究』pp. 233–266, 明治書院
- 中野弘三編 (2017) 『語はなぜ多義になるのか』朝倉書店
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』くろしお出版
- 早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化—文法を文化で切る—』アルク
- 松中義大 (2008) 「日本語接続助詞に関する一考察『うち』『なか』を中心に」篠原和子・片岡邦好 (編) 『ことば・空間・身体』pp. 151–178, ひつじ書房
- 初山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
- 山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京大学出版会
- Backhouse, A. E. and Quackenbush, H. C. (1979) Aspects of *UCHI* Constructions, *Papers in Japanese Linguistics* 6: 51–86.
- Johnson, M. (1987). *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. The University of Chicago Press.
- Johnson, M. (2005). The philosophical significance of image schemas. In Hampe, M. (Eds.). *From Perception to Meaning Image Schemas in Cognitive Linguistics*, *Cognitive Linguistic Research* 29: 15–33, Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G., Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.

- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Volume 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (2000). A Dynamic Usage-Based Model. In Barlow, M. & Kemmer, S. (Eds.). *Usage Based Models of Language* 1–64.
- Langacker, R. W. (2008). *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.

#### その他資料

新村出編 (2018) 『広辞苑 第7版』 岩波書店

#### コーパス

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ) : [https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)

## The Polysemic Network of Japanese Abstract Noun *Uchi*

Ruchira Palihawadana\*, Yuichi Takahashi\*\*, Atsuko Kondoh\*\*\*

### Abstract

The purpose of this study is to reveal the network of the various meanings of the Japanese abstract noun *uchi*. Since *uchi* prototypically denotes that the referent is inside a certain bounded area of space, it can be conceived as an expression of ‘inside a container’. Its schematic meaning ‘inside the boundaries’ extends to various expressions of enclosures.

First, it metaphorically extends to houses and then via image-schema transformation to its contents, i.e., the residents. Thereby, *uchi* acquires a pronominal first-person usage (especially when used plurally) and meanings such as ‘family’ and ‘spouse’. It is well-known as an expression of the in-group. Through image schemas center-periphery and near-far, it extends into social in-groups such as affiliated institutes to which ‘I’ belong, thereby expressing various degrees of affiliation and social distance. *Uchi* metaphorically extends to parts of various masses and categories. Furthermore, it extends to temporal constructions to produce various expressions denoting temporal conditions, durations, etc. This variation is brought forth by different focusing patterns of the boundary.

**Keywords:** *uchi*, container, boundary, metaphor, network

---

\* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

\*\* School of International Communication, Senshu University

\*\*\* The University of Tokyo (Emeritus)